




食べる 
つながる 
育つ 

保育園給食から（後）

— 親たちの学び

兼田祐子

（朱い実保育園）

未知の世界に突入する親たちと子育てをしていくために

（本稿前編では、保育園の離乳食、給食について私が模索してきた過程について書いてきました。）

その当時、離乳食でいろんな素材の味を経験させるほうがよいということが言われていて、わざわざネギやシイタケを離乳食の食材に使うことをしている保育園の給食があったことを覚えています。この時期にいろんなものを食べなかつたらその後の味覚に悪い影響を及ぼすというような研究をそのまま受け取ったようです。子どもたちによかれという発想からでしょう。確かに離乳期が冬で、その時期にスイカを食べなかつたら一歳児になって初めてスイカを経験することになるので、初めてのものに警戒をし、食べ慣れたものを好む一歳児は、飛びつきはしないものです。そこにこそ離乳食の意味があります。

食事をしながら「自分の周りの人が食べているものは安心して食べていいんだな」という感

兼田祐子（かねだゆうこ）

京都大学の一角で親たちによる共同保育から始まった朱い実保育園の園長先生。いつも元気と肯定感にあふれている。長年、同園で栄養士として子どもたちの給食を切り盛りしていたが、2010年より現職。

覚が育っていきます。これは野生の動物から学びました。懇談会でお母さんたちにそのことを話すと妙に納得してもらえました。きつと自然界の摂理が納得を生んだのでしょうか。食べることうれしい、待ち遠しい。食べてほしいものがその時は食べられなくていい。それが食卓にあり、食べてみたいと思つた時に食べられる環境がつくれるようになっておくといいなと話してきました。「いつか食べられるようになるというスタンスで臨むといいよ、保育園でも子どもたちには食べなくても見るだけ、なめるだけという猥褻もあるんだよ」と。

家と違って保育園のいいところは、作る人と食べさせる人が違うこと。自分の経験を照らしてみても、家だと、せっかく苦勞して作つたのに子どもが食べないと、自分の苦勞が無駄になつたと、どうしてもマイナスに受け取つてしまいます。保育園では、「今日はあかんあ。食べたくなのかなあ。この感触が嫌なんかもしれないなあ」と、あつさりと受けとめることができます。「食べないこと」で親が自分を否定されたと思わずに済むことも、「今日食べないこと」をおおらかに受けとめられる良さでもあります。

「どうしたら早く作れるの?」「どんな作り方なの?」という親の要望にこたえて、離乳食の調理実習を家の圧力鍋を持ってきてもらつてやってみることもあります。自分の生活の中で実現できる一歩をどうやつたら見つけてもらえるか。「だしがおいしかった」。それだけでやってみようと思える保護者もいます。

誰にでもある「初めてのいこと」から学びが生まれる

私自身は二〇一〇年から保育園を運営していく職務に替わりました。離乳食やアレルギー食

を通して保護者や子どものことをおしなべて知っているから何とかなるだろうという、今から思えばびっくりするぐらいの肯定感で園長業務を承諾してしまいました。

今、私たちの保育園では中堅栄養士一人と管理栄養士の資格を取得した二名の若い職員が今までの献立をもとに計画を立て、献立の中に活かして、毎日の給食作り・食にかかわる活動をしています。数年前、彼女たちもまだ学生だったころ、管理栄養士の卵として給食の実習に来た学生さんから「トウモロコシの皮を初めてむきました」と言われた時にはびっくり。「ズイキって何ですか」「セリを使うのも初めてです」という若い世代が献立を考え、食に係る計画を立てています。

しかしながら自分に置き換えてみると「イナゴの佃煮を作ったことはないし、沖繩のヘチマ料理はしたことないなあ」と、誰でもあることだと気付きます。食材を選択し、調理していくということは、その土地への理解とそれまでに経験してきたことが大きくかかわってきます。九州から京都に出てきた私も、京都の調理師さんと仕事をする時に、切干大根の炊き方やちらしずしの作り方で「違うなあ」と感じました。献立を立てる役割は私でしたが、作る時の主役は調理師さんでした。彼女は年齢も調理技術も味付けも私よりずっと上でした。栄養摂取に軸足を置いた献立の時には、「何かこの取り合わせ、おかしいで」と鋭い突っ込み。「食べんかつたら何にもならんやん」「確かに」……。そんな時期を経ながら、今生活している所で確かなものを一緒に作り出し、アンテナを張って、つたなくもその裏付けをしてみた食へのアプローチでした。

学びは生活の中にある

私には近年言われるようになった「食育」という言葉が何やら耳障りに響くのです。身にまといにくいスーツを着せられているような感じですか。「子どもたちの生活の場に自然を開示すること」に共感し、「園庭が心の原風景となる」ように（第一二巻春・夏号の本連載、倉田新氏の文章から）、おつゆや煮物のだしをとるそのいいにおいを子どもたちの嗅覚の原点として残したいのです。毎日の繰り返し返される暮らしの中に期待と安心と興味がそえられることがあることを大事にしていきたいのです。次の世代の人たちも自分自身の発見と興味を子どもたちにも伝える努力をしています。

今日も、「おやつの後、明日の枝豆を枝から外してくれる？」とお手伝いを呼びかけようと、わざわざ枝付き枝豆を八百屋さんに持ってきてもらっています。給食室の横では年長さんが大豆を植えています。枝豆で食べるのかな？ 大豆にするのかな？ と私は興味津々です。

親たちの生活も、赤ちゃんがいる生活と自分の仕事との兼ね合い、連れ合いとの関係など思うように進まないことばかりです。朝夕の保育者・他の保護者とのちよつとした話や、クラス全員が書き込める毎日一枚の日誌。そこで食事のことや夜中の母乳の回数など、ほかの人のも見ることができ、親同士で共感したり、「どうしてるの？」と聞いてみたりできる関係をつくっています。お昼休みに授乳に来られる人は、保育園の昼間の生活を知り、働くことと子育てについての気持ちの落としどころを確かにしています。